

Title	麻疹の今昔
Author(s)	奥野, 良臣
Citation	makoto. 1973, 2, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86277
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

誰でもかかるハシカ

世界は一つ、ハシカウイルス

ハシカは昔からある一般的な病気です。昔のハシカと今のハシカを比べてみると、本質的には同じですが、変わった点も少なくありません。

誰でも一生に一度はか、り、二度とはか、らないことは古今東西を通じて変らない鉄則のようなものです。それは何故でしょうか。ハシカの原因となるウイルスは一種類しかなく、インフルエンザのように毎年抗原型が変るようなことは無いので、一度か、つて治れば強い免疫ができ、変った型のウイルスなどないのですから、もう再びか、ることはないわけです。昔のウイルスも、外国のウイルスも皆同じものです。ハシカウイルスについて云えば正に「世界は一つ」なのです。

このウイルスの伝染力と発病力はまことに強いので、人はまず誰でも感染し、発病を免れることはできません。ですから一度は必ず起る現象、避けて通れない物事に対し、ハシカのようにと警えられます。西洋の諺にも「恋愛はハシカのようなものだ。みんな一度はか、らなければならぬ」と言われています。

昔は大人もかか

つたハシカ

昔と今で変わった点と言えば、まず流行のし方と病気の重さが挙げられます。明治初期までの日本のハシカは20、40年の間隔で大流行し、その間は全くありませんでした。この病気の感受性は年齢に関係ありませんから、まだか、つていない人なら何歳でもか、ります。例えば40年目に流行があると、40才以下の人に

はほとんどか、り、40才以上の人は誰もか、らないと云う風な現象が周期的に起きていたと思われま。その辺の事情は江戸時代のハシカ絵によつて窺い知ることが出来ます。そのうちの一枚で宗田一氏のものを用じてここに掲げました。

昭和に入つて二年ごと、最近では毎年、しかも季節を問わず流行するようになりましたので、勢い小児期にか、つてしまひ今ではハシカは子供の病気となつてきましたが、昔は大人もかかる病気であつたわけです。

「秀吉軍の中に戸沢平九郎光盛という武将がおりました。この人が長い戦陣の最中にハシカに罹つて死亡しました。三、四十になつてハシカというのも妙な話ですが、とにかく、そう言うことになっております。

麻疹(ハシカ)の今昔



奥野良臣 (大阪大学教授)

「これは大阪講談界の長老旭堂南陵演ずる太閤記の一騎である(ワダ・シユウサク、日本医事新報)。ハシカが子供の病気だと思つて「妙な話」になりませんが、いま述べた疫学から見れば、昔は大人がか、つて死んでも、何の不思議でもないわけです。

現在でも世界の中には日本の昔のような流行の形をとつて離れ島があります。グリーンランドやフアロア島がそれで、ハシカは船と共に六十年目位に入つて来て、六十才以下の人は99%か、り、それ以上の老人はか、らなかつたとのことです。まことに免疫がはつきりしています。

ハシカは命定めか

病気の重さもかなり変わつてきています。「ハシカ済むまでわが子と思ふな」とか「ハシカは命定め、疱瘡は器量定め」とか言われて恐れられ、死亡率が高く、年間数万人も亡くなつていた昔に比べ、今ではわが国年間の死亡者が一千名を割るようになりました。罹る人数は人口の増加と共に多くなつてはいる筈ですが、死亡者が激減したのは栄養の改

善や化学療法の發達に負う所が多いと思います。しかし死亡しないまでも病気の苦しみは相当なもので、今も小児の大病であることは変りないと申せましよう。

ワクチンでハシカ退敵

ハシカは果して不可避であるか？ 昔から何とかか、らない

ようにといるく、工夫されましたし、か、つても軽くすむようにと念ずるのは親心でした。つい先年田舎で「子供るす」と書いて逆さに門口に貼りつけてある家を見かけました。私共が小学生であつた大正時代によく見かけたハシカ除けの呪いでした。「子供るす」とは子供が居るとの証據ですが、逆さに貼るのは

病魔は天から降りてくるためでしょうか。

ハシカ対策で昔と変つた最大のもの、やはりワクチンの出現です。わずか数年前からのことですが、ワクチンが使えるようになり、これを接種しておけばほぼ確実にハシカに罹らずにすむようになりました。

ハシカは誰でも一度はかゝる

ものだ、必ず通らねばならない関門だとされていたのは、ワクチンができて昔物語りになりました。鳥のように空を飛んでみたいとの昔の人の夢が実現して、今では飛行機が日常の交通機関になつているように、ハシカにかゝらないで済めばとの夢が漸く実現したわけです。

私はハシカ研究に執念を持つ

ておられた故谷口教授研究室（阪大医学部と微研）に入室を許されたお蔭で、ハシカの研究に従事できるようになり、十五年を経た一九五六年に微研に藤野部門が認められ、ハシカワクチンの出現に一翼を担うことができて、冥利につきる思いです。